

## ★巻頭言★

### Vol.17 No. 1 の刊行にあたって

2000年にパウル・クルツェンらが提唱した「人新世 (Anthropocene)」という地質年代の区分が、ますますリアリティをもってきている。開始時期には諸説あるものの、2023年7月12日に国際地質科学連合人新世作業部会が、カナダのクロフォード湖を「国際標準模式地」とすると発表した。その意味では、私たち人類 (ホモ・サピエンス) の存在と活動が地球環境に大きな変容をもたらしており、それが人類をはじめとした生物の存続を危うくしていることは否定できない事実として受け止められる。この「人新世」における危機を「持続不可能性」としてとらえ、持続可能な社会 (世界) への転換をもたらす行動目標が、「SDGs (持続可能な開発目標)」であると考えられる。

問題の一つは、現在、私たちが生きている世界がグローバリゼーションと呼ばれる地球規模の市場経済 (資本主義) であるということが、この危機 (持続不可能性) を助長しているということであろう。シンポジウム「変質する資本主義と共生社会形成の担い手」は、この問題に環境・資源・格差問題、食料安全保障、協同組合の可能性から問題提起されたものである。岸田内閣の発足時に掲げられた「新しい資本主義」も、政権を支える支配層の危機感の表明と見ることができるといえる。共生社会システム学会として持続可能な社会の実現と資本主義経済との関係について、引き続き研究し、議論を続ける必要がある。

とはいえ、「人新世」は資本主義以降の問題であると片付けることはできない。例えば、松井孝典が提唱する「アストロバイオロジー」(『宇宙人としての生き方』岩波新書、2003年) では、地球システムの中に「人間圏」が誕生したことにより「地球システムの構成要素が変わった」ことに注目する。文明は「人間圏をつくって生きる生き方」であり、農耕牧畜の開始 (約1万年前) が人間圏

の誕生であると定義される。こう考えれば農耕牧畜は「人新世」の前史であり、そこに地球レベルでの持続不可能性の起源があると見ることもできる。また、2022年のノーベル生理学・医学賞を受賞したスバンテ・ペーボの研究で注目された、次世代シーケンサの実用化によって急速に発展している古代DNA研究の成果からも学ぶ必要がある。篠田謙一は「ゲノムデータから集団同士の違いを見ていく際には、同じ集団の中に見られる遺伝子の変異のほうが他の集団とのあいだの違いよりも大きい」（『人類の起源』中公新書、2022年）と指摘している。これは、個人の性格や能力の違いは（明らかな遺伝子由来の障害等を除いて）「やはり遺伝的特性よりも環境における働きかけが大きい」ことを裏づけるものと解釈できる。

こうした遺伝的特性による文明の格差を強く否定しているのが、ジャレット・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』（草思社 2013）である。人類はおよそ700万年前にアフリカで誕生し、私たちの直接の祖先にあたるホモ・サピエンスも、約20万年前にアフリカに生まれて世界中に拡散していったと考えられる。では、なぜアフリカの文明がもっとも早く発展して、世界を制服することにならなかったのだろうか。いまから1万3000年～1万年前には5大陸のすべてに人類が到達し、同じ狩猟採集生活を送っていたにもかかわらず、なぜ大きな差が生まれたのか。この素朴であるものの、深い問いかけに答えるために、この差が西暦1500年頃にはすでにあったことに気づき、1万3000年前にさかのぼって「世界の不均衡」を生みだした要因を探ろうとした。つまり、民族等集団の遺伝的特性の差が文明の差をもたらしたのではなく、そこに移り住んだ人びとを取りまく環境の差が「世界の不均衡」をもたらしたのである。

さて、「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」、共生社会システムをキーワードに議論を続けたい。

2023年7月

共生社会システム学会

会長 朝岡 幸彦